



# 農作業メモ

## 果樹のハダニ類対策について

近年、夏が高温・少雨の傾向で経過する年が多く、果樹でのハダニ類の多発が目立ってきました。ハダニ類の生態や薬剤の特徴をきちんと把握し、適切な防除を行いましょ。

### 1 被害の様子

ハダニ類は主に葉裏に寄生して吸汁するため、吸われた部分の葉緑素が抜けて、白い小さな斑点を生じます。密度が増えてくると、これが白く「かすり状」に見えるようになります。

さらに被害が進むと、「梨やりんごでは「葉焼け」、かんきつ類では「葉肉崩壊症」となり、落葉することもあります。

### 2 発生の態

ハダニ類は、卵↓幼虫↓第1若虫↓第2若虫を経て、成虫になります。卵から成虫に発育するまでの期間は、ハダニの種類にもよりますが、20℃では16〜18日、25℃では10日程度と言われ

ており、高温、乾燥条件で多発します。また、1雌あたりの産卵数も数十個から、種類によっては100個以上になることもあり、これもハダニが大発生する要因の一つです。

### 3 防除対策

#### (1) 薬剤による防除

ハダニ類は成虫でも体長が0.5mm程度と小さいため、発生を見つけることが大変難しい害虫ですが、発生初期に防除することにより、その後の個体数を低く抑えることができます。早期発見、早期防除が鉄則です。

おもな薬剤は表のとおりです。薬剤によって、卵に効果があるもの、成虫に効果があるものなど、特徴があります。例えば、バロックフロアブルは卵や幼若虫に効果が高く、成虫への効果はありませんが、残効が期待できます。カネマイトフロアブルは各生育段階に

効果が期待でき、特に幼成虫には即効性があるようです。

ハダニ類の初発段階では卵に効果が高く残効が期待できる薬剤、多発時は成虫に効果があり即効性の薬剤を散布するなど、その特徴を考慮して選択しましょう。

ハダニ類は薬剤抵抗性がつきやすい害虫ですので、同一成分を含有する薬剤は連用しないようにしましょう。

すでに、薬剤抵抗性がついている可能性もあるので、薬剤を散布した後はきちんとその効果を確認しましょう。

#### (2) 薬剤以外の防除

梨などでは冬季に粗皮削りを行い、越冬ハダニの密度を減少させることも効果的です。

### 4 その他

#### (1) 整枝・剪定の工夫

せっかく薬剤を散布しても、薬剤がハダニ類に付着しないとその効果が発揮されません。整枝・剪定時には樹冠内部まで薬

剤が到達するよう、不要な枝を整理し、枝の重なりを少なくすることが大切です。

#### (2) 下草の管理

下草に生息していたハダニ類が除草に伴い果樹に移動してくることがあります。除草後は、果樹の葉をよく観察し、ハダニ類の発生が観察されたら、薬剤を散布しましょう。

表 ハダニ類に登録のある主な薬剤 (登録内容は平成25年5月現在)

薬剤名	農薬使用基準 (収穫前日数/使用回数)					
	ナシ	リンゴ	モモ	スモモ	イチジク	ミカン
バロックフロアブル	14/2	14/2	7/2	7/2	前/1	前/2
コテツフロアブル	前/3	前/2	前/2	前/2	前/2	—
ダニゲッターフロアブル	前/1	前/1	前/1	前/1	—	—
ダニサラバフロアブル	前/2	前/2	前/2	前/2	前/2	前/2
カネマイトフロアブル	前/1	7/1	7/1	3/1	—	7/1
マイトコーネフロアブル	前/1	前/1	前/1	3/1	前/1	7/1
ニッソラン水和剤	7/1	7/2	7/2	—	前/2	7/2

・前は使用時期が収穫前日までを表す。  
・薬剤によって、小粒核果類、かんきつで登録されている場合がある。  
・薬剤によってハダニの種類が限定されている場合がある。  
・農薬は必ずラベル表示を確認して使用してください。